

ヒトラー～最期の12日間～

2005(平成17)年8月13日鑑賞心斎橋パラダイススクエア

★★★★



監督＝オリヴァー・ヒルシュビーゲル／製作・脚本＝ベルント・アイヒンガー／原作＝ヨアヒム・フェスト『ヒトラー～最期の12日間～』、トラウドゥル・ユンゲ&メリッサ・ミュラー『私はヒトラーの秘書だった』／出演＝ブルーノ・ガンツ／アレクサンドラ・マリア・ララ／ウルリッヒ・マテス／コリンナ・ハルフォーフ／ユリアーネ・ケーラー／ハイノ・フェルヒ／クリスチャン・ベルケル／トーマス・クレッチマン（ギャガ・コミュニケーションズ配給／2004年ドイツ映画／155分）

……戦後60年目の8・15を迎えた日本では、さまざまな特集が生まれ、「あの日」の総括に大わらわ……？ そして9・11に設定された衆議院議員総選挙の投票日は、構造改革の行方と日本の進路を左右する天下分け目の「関ヶ原の戦い」となること明らか。そんな中、戦後59年間タブーとされていた「ヒトラーの映画」がドイツ語によるドイツ人俳優とドイツ人監督によって日本でも大公開！ その評価や賛否は「東京裁判」をめぐる論争以上に複雑だが、ヒトラーの人間像の一部を知ることができることはたしか！ 何ごとも学習が大切だと私は思うのだが……？

第4章

そろそろ勉強の時間

冒頭のおことわり

私はこの映画の評論を書くにあたって、インターネットでヒトラーに関する資料をたくさん調べて事実確認をしたところ、4月29日結婚、4月30日自殺が正しいという心証に達した。すなわち、私がインターネットで調べた限りでは、エヴァとの結婚は4月29日、正確には28日深夜から29日の早朝、市職員のヴァルター・ワグナーの立ち会いで行ったもので、結婚証明書の日付は29日とされている。また、ヒトラーの自殺は翌4月30日とされている。ただし、その時刻は午後3時50分とするもののほか、諸説があるとのことだ。

ところが、この映画のパフレット中にあるヒトラーの人物紹介のページには、ヒトラーがエヴァと結婚したのは4月30日、自殺したのはその翌日と書いてある。

他方、続く側近たちの紹介中のゲッベルスの紹介においては、ゲッベルスたちはヒトラー自殺の翌日5月1日に自殺したと書いてある。これは明らかに矛盾しており、どちらかが誤っていることは明らかだ。

また、この映画のタイトルとなっている「最期の12日間」は、ヒトラーが総統官邸地下要塞にこもった4月20日からヒトラー自殺の4月30日までと考えると1日計算が合わないという疑問が湧いてくるのも当然。したがってこの映画は、ヒトラーが自殺した4月30日までではなく、ゲッベルスたちが自殺した5月1日も含めて12日間と言っているのだと私は思う。これは、後述の原作を読めば、もっとはっきりするのも……？

また、後述のパンフレット中の「ヒトラーと映画」の解説中には、イギリスの名優アレック・ギネスが主演した『アドルフ・ヒトラー／最後の10日間』（73年）も紹介されている。もちろん私はこの映画を観ていないが、映画製作の意図は同じであるところ、なぜその最期が10日間と12日間に分かれるのだろうか……？

そんな疑問を持ちつつ、以下は「4月29日結婚、4月30日自殺」説を前提として書くことを、冒頭におことわりしておきたい。

原作と原題は？

この映画の原作は、ヨアヒム・フェストの『ヒトラー～最期の12日間～』と、トラウドゥル・ユンゲ&メリッサ・ミュラーの『私はヒトラーの秘書だった』の2冊。したがってこの映画は、この原作のタイトルどおり、1945年4月20日から5月1日までの「ヒトラーの最期の12日間」をヒトラーの女性秘書、ユンゲ（アレクサンドラ・マリア・ララ）の目を通して描くもの。

もっとも、原題は「Der Untergang」で、これは没落・破滅を意味するとのことだから、かなり邦題とはニュアンスが異なるものになっているが……。

戦後60年目の8・15は？

私がこの『ヒトラー～最期の12日間～』を観たのは8月13日だが、その映画評論を完成させたのは戦後60年目の終戦記念日たる今日8月15日。今日の新聞各紙は「戦後60年特集」のオンパレード。なかでも靖国参拝問題はテンコ盛りだが、

小泉総理は公約としていた8・15靖国参拝を実施せず、この問題は「先送り」となった。

その記念すべき戦後60年目の8・15という日に、「ドイツでの戦後60年」（正確には、ドイツでは2004年公開だから、戦後59年）を考えさせてくれたのが、この『ヒトラー～最期の12日間～』。2時間35分という長編だが、全然飽きることなく、スクリーンに見入ってしまうこと請け合いの話題作だ。

「ヒトラーのいちばん長い日」と「日本のいちばん長い日」

この映画のパンフレットにある川本三郎氏の解説「ヒトラーのいちばん長い日」は非常に面白い。まさにヒトラーが自殺するまで過ごした総統官邸地下要塞での12日間は、ヒトラーにとって「いちばん長い日」だったはず。

他方、日本では1945年8月15日が、1967年の三船敏郎主演の東宝映画のタイトルどおり『日本のいちばん長い日』だったが、来るべき日本のいちばん長い日は2005年の9月11日。奇しくも戦後の世界秩序を大転換させることになった2001年の9・11同時多発テロと同じ9月11日は日本の構造改革の行方と日本の進路を決定づける衆議院議員総選挙の投票日だ。

去る8月8日の参議院本会議での郵政民営化法案の否決によって決定された、来たる9月11日の衆議院議員総選挙に向けて、今や日本列島は「刺客」「国替え」「弾圧」「踏み絵」等々の物騒な言葉が飛び交う「暑い夏」となっている。小泉総理の参議院での法案否決＝衆議院解散の決意を甘くみた自民党内の郵政法案反対派の劣勢は目を覆うばかり。郵政民営化をテコとした「自民党ぶっ壊し作業」はいよいよ本格化した。これが「織田信長」的変革であることは誰の目にも明らかだ。

他方、党内に岡田党首をはじめ多くの小さな政府＝郵政民営化＝構造改革論者がいるにもかかわらず、タナからボタもち式の政権交代の可能性に民主党が走ったのは実に不可解。そのため、本来の自民党と民主党をガラガラポンした上での改革派と守旧派への政界再編最終章の完成が遅れることになるのは残念だ。こんな複雑な状況下で迎える9・11は、「関ヶ原の戦い」以来の天下分け目の大決戦であり、「日本のいちばん長い日」となることは確実。

万一この日の投票率が過半数割れなら、もはや「この国に明日はない」と私は断言したい。

ドイツのタブーとパンドラの箱

戦後長い間、ドイツ国家やドイツ国民にとって、ナチズムやヒトラーと真正面から向かい合い、その「是非」や「功罪」を論ずることはタブーであったはず。それらは100%完全に否定されるべきものであり、ナチズム台頭の不可避性やヒトラーという人物の価値を論ずるなどということ自体がもってのほかとされ、タブーとされていたわけだが、ある意味ではそれも当然……。

しかしパンフレットによれば、この映画を製作・脚本したベルント・アイヒンガーは、「私はドイツ語を使い、ドイツ人俳優とドイツ人監督でこの映画を撮影したかった」とのことだ。そして、その努力の結果つくられたのがこの『ヒトラー～最期の12日間～』だが、パンフレットの中の北小路隆志氏の解説「ヒトラーと映画」の中で紹介されているように、ヒトラー映画は全世界的にみても意外に少ないもの。

私がよく知っているのは『チャップリンの独裁者』（40年）だが、最近観た『アドルフの画集』（02年）はドイツのタブーにチャレンジした好作品だった。それはともかく、北小路隆志氏はこの映画を評して、「ドイツ映画界において半世紀以上にもわたって厳重に封印されてきたパンドラの箱がついにかじ開けられた」と表現しているが、さて……？

日本のタブーとパンドラの箱

他方、日本のタブーは、平和憲法絶対の思想の下で形成されてきたノー天気な平和主義にもとづく自衛隊（軍隊）論争。

そんな日本の戦後60年のタブーを破り、パンドラの箱をかじ開けた映画が、『ヒトラー～最期の12日間～』の公開と同時期の7月30日に公開された『亡国のイージス』だ。これによって平和憲法の下で60年間安全と平和を享受し、経済繁栄を謳歌してきた日本におけるタブーは完全に破られたと考えるべきだろう。そして、乗っ取られたイージス艦いそかぜの艦橋上で中井貴一演ずる北朝鮮の工作

員がつぶやく「よく見ろ日本人、これが戦争だ！」というセリフは、今年の流行語大賞に推薦したいほどの名文句だと私は考えている。

ヒトラーの側近たちとその離合

ヒトラーの側近として最も有名なのは次の3人。

- ①国家元帥のヘルマン・ゲーリング
- ②宣伝大臣のヨーゼフ・ゲッベルス（ウルリッヒ・マテス）
- ③全ドイツ警察長官のハインリヒ・ヒムラー

私はこの映画を観てはじめてゲーリングとヒムラーはヒトラーを裏切ったことがわかったし、逆にゲッベルスはヒトラー自殺の翌日、なんと6人の子供たちを毒殺したうえ、妻と2人で自殺してヒトラーに殉じたことがわかった。当然ながら、側近たちの選択もいろいろというわけだ。

また、興味深く学んだのは、第1に唯一の私服組の側近であり、ベルリン改造計画である「ゲルマニア建設」の総責任者となったアルベルト・シュペーア（ハイン・フェルヒ）。日本にはまず存在しなかったスケールの大きい都市計画のプロ中のプロだ。

そしてもう1人は、ヒトラーが「最も忠実な黨員」と称して自殺後死体の焼却を依頼する若き官房長官のマルティン・ボルマン。

これらの側近たちの動きは「日本のいちばん長い日」である1945年8月15日後の天皇陛下の側近たちの行動と対比しても、きわめて興味深いものだ。

五木寛之の小説にみるゲーリング像

私が弁護士登録直後の若き弁護士時代に読んだ五木寛之の『戒厳令の夜』は、スペインの大画家パブロ・ロペスの幻のコレクションをめぐる、ナチス占領下のフランスのフランコ政権内戦下のスペイン、そして戒厳令下におかれたチリなどを舞台に展開される一大ロマン小説だが、その土台を流れる秘話がヒトラーとその側近のゲーリング。

空軍大臣であったゲーリングは情熱的な美術愛好家であり、ロペスの幻のコレクションには彼の関与が……？ 今でもドイツのメルセデス・ベンツ車の優秀さ

は世界一だが、『戒厳令の夜』には猛烈なスピードマニアであったヒトラーが、自分で「グロッサー」と呼ばれるマンモス・ベンツを飛ばして、ベルヒテスガーデンの別荘へ高速ドライブしたというお話や、宣伝相のゲッベルスはヒトラーの運転する車には、怖がって乗ろうとしなかったが、空相ゲーリング元帥はさすがに度胸がすわっていた。彼は深夜の山道のタイヤから煙を吐くほどのハードなドライブにも平然として、ヒトラーが無茶な運転をすればするほど皮肉な微笑を浮かべていた、とのお話が描かれている（『戒厳令の夜・上』新潮文庫、330・331頁）。

小泉総理の側近たちは……？

現在展開されている衆議院議員総選挙に向けての自民党の内部抗争は前代未聞のすさまじいもの。亀井静香氏が「ヒトラー的」とか「ヒトラーでもやらなかった無茶苦茶な選択」と、小泉総理を非難しているので、ここでひやかし半分に、小泉総理の側近たちとその離合を思いつくままに少し考えてみたい。

まず第1に蜜月状態の夫婦関係（？）から骨肉相はむ憎しみへと転化したのが、小泉 VS 田中真紀子。次に、郵政民営化法案に反対したために、今や自民党公認の道を閉ざされた後、未練たらしく「昔は〇〇だった、△△だった」と述べているのは、東京10区の小林興起氏や東京12区の八代英太氏。そして比例区東北の荒井広幸氏など。亀井静香氏の怨み節はもはや聞きあきた感があるが……。

他方、小泉総理の側近中の側近のナンバー1が安倍晋三氏だし、森派の重鎮、中川秀直氏も同じ。官房長官として最長記録を達成した福田康夫氏は、今はなりをひそめているが、果たしてこの後は？

政治の世界は権力抗争だからかつての「角福戦争」に代表されるように、「昨日の敵は今日の友」は当たり前。したがって側近といえどもそれが永久に続くものでないことは当然。織田信長が側近中の側近であった明智光秀に討たれたように、いつ小泉総理が殺されるか……？ 政治の世界では一寸先はヤミ。

56歳を考える……？

ヒトラーが総統官邸地下要塞にこもったのは1945年の4月20日。そして側近たちと愛人のエヴァ・ブラウン（ユリアーネ・ケーラー）や秘書のユングたちに囲

まれて誕生日を迎えたのもこの4月20日。そしていよいよその最期を覚悟し、エヴァと質素な形ばかりの結婚式を挙げたのが4月29日。そしてエヴァとともに自殺したのが翌4月30日。

私がこの映画を観てはじめて知ったのは、この地下要塞内で祝った誕生日は56歳の誕生日だったということ。この映画で観る限り、この時期のヒトラーはパーキンソン氏病が進行していたらしく、後ろに回した左手はずっと震えているうえ、その丸めた（曲がった）背中をみても、かなり衰れで衰弱した老人そのもの。そのうえ、かつてならした迫力ある演説と同じように、声は張りあげることができても、そのしゃべっている内容は現実離れ、というより妄想そのもので、側近たちをあぜんさせせるもの。

私も今年1月56歳になったが、こんな衰れな老人にならないよう日々努力しなければ……？

ドイツでは大ヒットだが、日本では……？

この映画はドイツで大ヒットし、ドイツアカデミー賞最優秀男優賞・最優秀製作賞・観客賞等を受賞し、さらに、2004年アメリカアカデミー賞外国語映画賞にもノミネートされたとのこと。しかし、日本では……？

私は、年輩者を中心に私と同じような問題意識で、この映画に興味を示す人が多いはずだと期待していたのだが、意外に客足はのびていない様子。私が観た8月13日土曜日の6時25分からの上映も、観客は年輩者がほとんどで50名前後と客席はガラガラ。これは何とも残念な状況……。

激しい賛否両論は当然！

ヒトラーの最期の12日間を女性秘書ユンゲの目を通して描くこの映画は、無色透明の映画ではなく、製作者や監督の価値観が入っているのは当然。それはもちろん、ヒトラー讃歌でもなければ、ヒトラーの全否定でもないが、2時間35分という時間の中に彼らの視点や価値観が確実に示されている。

しかし、こういうヒトラーの最期の12日間を映画化すれば激しい賛否両論がまきおこるのは当然。パンフレットによれば、ドイツ国内だけでも、賛成論として

「切に忘れたい事実を強烈に映し出す偉業は誰しもができるものではない」(シュピーゲル紙)、反対論として「殺人鬼の人間性を振り返る必要など、どこにあるのだろうか」(ターゲスシュピーゲル紙)がある。

そしてユダヤ人が戦後やっとなり建国した国イスラエルでは、当然のように「ドイツはユダヤ人大虐殺の歴史を取り繕い美化している」(エルサレムポスト紙)と評されている。

同時に観たい対極の映画……

この映画では最初と最後にユングの告白が語られているが、600万人もの同胞を虐殺されたユダヤ人にとっては、そんな一介の「弁解」によって納得できる問題でないことは明らか。

したがって、ヒトラーの最期の12日間は史実に沿って、ドイツ人監督の解釈とドイツ人俳優の演技によってスクリーン上に描かれること自体を許せないと感じるのは当然のこと。

しかし、前述のように、戦後60年を経た今、いつまでも「タブー」をひきずっていたのではダメなのは明らか。

その意味で私が乱暴ながら薦めたいのは、この『ヒトラー～最期の12日間～』と同時に、涙なくして観ることができないユダヤ人の虐殺をテーマとした映画として『ライフ・イズ・ビューティフル』(98年)や『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』(99年)などを観ること。

「同時に観たからどうなんだ？」と真正面から問われるとそれに対する明確な回答があるわけではないが、私の感覚としては、それがもっとも人間的な理解の仕方であるように思えるのだが……？

2005(平成17)年8月15日記